

---

# 八月のさいごの日に

音宮 音音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

八月のさいの日

### 【Zコード】

Z8042E

### 【作者名】

音宮 音音

### 【あらすじ】

ほぼ二ートな画家の僕と人妻裕子さんのお話。

雲はのんびりと流れ  
る。

まるで動いてないかの様に見えるけど、じーっと見るとじつは「や  
うつくりと動いているようだ。

例えば積乱雲をでっかい綿飴と思つたりする。

そうすると、あのせりせり流れる様な雲は、さつと素麺だ。

「腹減った。」

人間、空腹には耐えられない。

食欲というものは、睡眠に対する欲求より、異性に対する欲求より  
抑えられない、一番原始的な欲求な気がする。

「そーめん。」

こんなジリジリ焼けるような暑さでも、僕は食欲を失つたりしない。  
素麺のその食感とか、めんつゆの味とか思い浮かべて、どうにも食  
べたくて仕方がなくなる。

「裕子さんに作って貰おう。」

裕子さんは人妻だ。料理が上手い。  
苗字は知らない。

料理が上手い。

「さすが裕子さん。今まで食べた素麺の中でダンントツで一番だ。」

「素麺なんて茹でるだけだし、誰が作っても変わらなこと思ひナビ  
…。」

「いや、茹で具合とか、茹でた後スピーティーに水に通さなきゃ  
くつついて駄菴になっちゃうし…だからこそ裕子さんに頼むのさ」

「あ、わづ?…じゃあ褒め言葉、素直に受け取つとくわ。ありがとう。

」

裕子さんはニコニコと笑顔を見せた。

一月2万3千の安アパート。その中で茹であがる『家庭の味で最高  
峰の素麺。

情緒がないけど。

まあ、食えればいいし。

ヤミはミンミン焼いし。

「ところで、先生は今田じままで行つてたの?」

「自動車教習所の辺り。」

「結構遠くまで行つてたのね。」

…裕子さんは僕の事を『先生』と呼ぶ。

「あの辺りが凄くいい風景だったんだ。描きたくなるよ!」

「さすが画家先生ね。インスピレーション感じたんだ。」

画家。そういう職業。

と言ひか、『画家』と書いて『一ート』と読む職業だ。  
これはけして、画家の先生はみんな一ートと言いたいのではなくて、  
僕自身が画家と言われる程、絵で稼げていないと云うだけで。  
そりやあ僕だって、ゴツホだの偉人さん方を一ート呼ばわりはしないさ。

「インスピレーションなんて大層なもんじゃないけど、凄く雲が綺麗だったんだ。見た事ない位形のいい積乱雲。」

「へえ…。描いたら見せてね。」

「うん。」

僕が外で何が綺麗だったとかそんな話をする度、裕子さんは優しそうに微笑む。

そうしてしばらぐ一緒に素麺食べていたが、まだなくならない内に裕子さんは手を合わせる。

「もう満腹?」

「ええ。」

「じゃ、僕全部食べちゃつよ。」

「うん。…」んなに美味しそうに食べててくれて、嬉しいわ。」

裕子さんが微笑む。

僕は食べ終わるまで、ずっと裕子さんに見られていた。

裕子さんは洗い物を済まし、緩く結わえていた長い黒髪を下ろし、  
ポニー・テールに縛り直した。

それから、買い物に行くらしくて、僕は一人になつた。

「あ～。」

やる事もないのに、扇風機に向かい声を出す。  
小さな子供の頃からやっているので、今さら楽しくもないが。

「う～。……ワレワレハ、ウチュウジンダ。」

…べつ、別に…楽しくなんてないんだからつー。

「ワレワレハ、チキュウジンダ。」

宇宙に向かつて訴えてみた。

ん。あれ?

：そもそも宇宙人ってなんだ？地球も宇宙のなかにあるんだから、  
地球上も宇宙人だと思うんだが。  
日本人のいう外人みたいなものか？

ここにいるものたちと、ことなるもの。

「宇宙人…つまり異端という事、」

じゃあ。

「僕は宇宙人だ。」

だからなんだ。

「…暇だ。」

暇なら画家だ、絵を描けとでも誰かに言われそなうものだが…。  
描きたいって時に描くのが画家だと思う。

描きたくない時も描かなくちゃいけないのは、漫画家やイラストレーターだ。

だから僕はただひたすらに寝転がり、色々な事を考えて裕子さんの帰りを待つた。

セミ達はちょっと静かになっていた。  
窓から外を見ると、空は赤く染まり、雲の流れは少し速くなっていた。

「…おはよう、裕子さん。」

「おはよう、先生。」

頭の下には、とても滑らかで柔らかい感触があつた。

裕子さんは優しく僕の頭を撫でて、その手が心地よくて、僕は目を細めた。

「ねこみたい。」

いやあ、とでも鳴いたらいいのだろうか。  
何度か撫でられたと、本当に喉がなつた。

「ふふ。」

興が乗つたのだらつ。

髪をとかす様にサラリサラリと柔らかく触れてくる。

心地いい…けど、少しだけ恥ずかしくなつてきた。

「裕子ちゃん。」

裕子ちゃんは撫でる手を止めない。

少しふりふりで熱っぽい目で髪のひとつを、ふたふた眺めてくる。

「ひひ… やん。」

髪を滑る手をつかまえる。

…手は、濡らかだけじほんの少し荒れていた。

「お腹空いた。」

「…やうね、やうやう夕食にしてしまつか。」

裕子さんは優しい笑顔をして、僕の体をわざと起して  
離す手が少しだけ…名残惜しそうだった。

トントントントン。

包丁で野菜を切つていいく音は好きだ。あと、鍋のグツグツする音とか、ジューージュー炒める音とか。

「とにかく僕は、食べる事が好きみたいだ。  
メタボになつてない奇跡。といつか体质？」

むしむし痩せ型なんだけど…。

つて中学位で気付いて女子に言つたら、殺意に近い目で見られた。  
いや、あの脣は確かに「口ロス」の形に動いていた…と思つ。

「そんなんじゃモテねーぞ。」

つて親友が言つてたけど。確かにそいつモテてたけど。  
そいつは元の造りが違うし。モテルになつたらしいし。

まあ。別にどうでもいいけど。

今の僕は、十数分後には出来るべからう晩飯をワクワクしながら待つ事しかできないのだ！

ああもつ。

「ロロロロロロ。

待ち遠しいなあ。

「ロロロロロロ。

まだかなあ。

“ガローパロガロガロガロ…。

がばつー！

「手伝おつか?」

「あら珍しい。よっぽどお腹空いたのね、先生。」

フフッと笑う裕子さん。

そんなにいつも裕子さん一人に家事…させてたな。

「じゃあ、お芋つぶして貰おつかしぃ。」

「うん、任せて。」

とは言つたものの。

僕は自分の不器用さを失念していた。

上手く潰せない。

「先生、貸して。」

見かねた裕子さんは、僕からボールを受け取りササッと潰してしま  
う。

…全然駄目だなあ、僕は。

まあ、人間には得手不得手があるし。

「「めんね、裕子さん。」

「いいのよ。私、料理するの好きだし、先生が美味しいぞうに食べて  
くれるのも嬉しいし。ね。」

何だかちょっと、子供扱いされているような気もしたが、裕子さん  
の優しさに甘える事にした。

今度は大人しく座つて待つ。

クイズ番組を見てじつと座つていると、程なく料理が出てくる。  
主菜は焼魚。鮭だ。ポテトサラダにキンピラ「」ボウも出てきた。  
空腹で耐えられなくなっていた僕は、裕子さんが座つたらすぐに手  
を合わせた。

「んまいつ。」

どうしてだろう、今日はすこく空腹だった。

裕子さんの絶品料理は、より美味しさを増しているような気がした。

「先生、ほっぺに」飯つぶが。」

裕子さんは腕を伸ばし、僕の頬についたご飯つぶをとつて、パクッ  
と食べる。

「ん、ありがと。」

僕は食事を再開する。

「あ、向かいの奥さんにスイカ貰つたから、あとで食べましょ。」

「うん。食べよ。」

「…スーパーの右の道、通行止めになっていたわ。これから遠回りしなきゃならないわね。」

「うん。面倒だよね。それにこんな時期に工事なんてね。」

少し間があいたあと。

裕子さんはおずおずと口を開いた。

「…先生。」

「ん、何?」

「あの…ね。」

そこで言葉を区切り、黙りこむ。

僕は、黙つて待つ事にした。

「……。」

「……。」

「……。」

裕子さんは頭を伏せ、堪えるように口を開いた。

「うん。」

僕は一言だけ答えた。

裕子さんは、一瞬すがるような目で何か言おうとしたが、すぐ口を閉じた。

それから部屋は、僕が一人でいる時より静かになった。

食事が終わって、裕子さんが片付けしている時。

「風呂屋行つてくる。」

僕は銭湯に行く事を裕子さんに伝えて、外に出ようとした。

「待つて、私も」

裕子さんが小走りに寄ってきたが、僕の顔を見て、止まる。

「…いや、なんでもないわ…行つてらっしゃい。」

「うそ、行つてきます。」

頭と体を洗い、湯船に浸かり、十数えてあがる。

僕は元来カラスの行水だ。

こんな熱いお湯に長時間浸かってたくない。

僕が帰つてくると、入れ替わりに裕子さんが銭湯を行つた。

僕はちやぶ台をよけ、布団を敷いた。

「ロロ」と横になる。

眠い。昼間あんだけ寝たつていうのに、眼氣は幾らでも湧き出でへ

る。

といつか田を瞑りたい。蛍光灯の電気が田に痛い。

電気を消す。

静かな部屋。あつたかくてつめたくて、すべての違和感を包み込んでくれた、この部屋。

「ありがとう、さよなら。」

田を瞑る。

ガチャッといつ音がして人の気配。

「…先生、もう寝てる…？」

畳の上を静かに歩く音。

「……。」

「寝てる…か。」

僕の頭の横あたりに座る気配がして、首筋に水滴が落ちてきた。

「…せんせ…。」

少し掠れた感じの色っぽい声。石鹼とシャンプーの香り。薄く濡れた髪の房も落ちてくる。

「……。」

「……起きてるよ。」

目を開けた時、裕子さんの顔が目の前にあった。

「裕子さん。」

裕子さんは、少し驚いて顔をよけた。

「先生、起きてたんだ。」

「うん。」

外の月を見ながら答えた。

「……ねえ先生。」

「ん?」

「先生のストーカーだつたって言つたら、どうする?」

「知ってる。」

裕子さんは一瞬目を見開いたけど、すぐに困った様に微笑んだ。

「そつか……。」

あれは小学生の頃か。

僕の登下校を後ろから眺めてる、高校生ぐらいのお姉さんがいた。  
校舎の外から授業を眺めてるお姉さんがいた。  
家の外から眺めてるお姉さんがいた。

遊びに行くと、物陰に隠れながらついてくるお姉さんがいた。

「今でも、私は……。」

裕子さんはそこで言葉を止めた。

「……。」

「……。」

「知ってる。」

「……！」

裕子さんは何か変な顔をした。

嬉しいのか哀しいのか、苦しいのか。

僕は裕子さんの頬に手をてる。

「知ってる。君が僕を追いかけていた事。君は僕が欲しかった事。  
…今でも欲しい事。」

全部知つてて、君と暮らした。

夫とケンカして居場所を無くした君。お金が足りなくて、家賃が払  
いきれない僕。

「じゃあ、ルームシェアしてくれない？」

君はきっと、僕が気付いてないと思つたんだろうナビ。  
僕は君の事を覚えてた。ずっと。

「裕子さん、帰らないと駄目だ。」

「でも先生、家賃払えな」

「帰らないこと駄目だ。」

裕子さんの言葉を遮る。

「…田那さんの事、愛してるんだろ?」

僕に対する感情は一瞬の熱情だ。たとえ、十年越しの想いでも。野良猫にちよつかいだしてゐる様なものだ。  
永遠の愛に勝てるものか。

「…あ、う、あああつ…」

裕子さんは叫びとも嗚咽ともつかない声をあげ、涙を流した。  
それから一時間位はずつと泣いていた。

「…先生。」

のどの痛そうな声。

「何?」

「最後にお願いがあるの。」

裕子さんは窓にもたれかかる様に座る。…裸で。

「先生…。」

裕子さんの腰が小さく動く。

「…じゃあ、始めようか。」

朝。チチチチと鳥が鳴き、僕は田を覚ます。  
とはいって、日が昇りそうな位まで起きていたのだが。

寝る前に裕子さんは布団をかけておいた。

そして。

田の前には、キャンバス。そこには描かれた裸の女性。

「…」

裕子さんが起き上がる。

「おはよっ、裕子さん。」

「…おはよっ、先生。」

こつもの様に朝の挨拶を交わす。こつもは裕子さんが先に起きてる

けど。

「私、途中で寝ちゃったみたい。」

「寝ても動かないで居てくれたから、よかったです。」

裕子さんを手招きする。

「完成したのね…綺麗。」

長い黒髪の女性はその艶やかな髪を全部下ろし、白い肌にまとわりつかせていた。

窓に体をもたれかかせて。

その窓の先にあるのは……綺麗な積乱雲。

「雲、描いてくれたんだ。」

「約束だからね。」

二人は笑い合つ。

昨日の事もこれから的事も、全部なかつた事の様に。

「ねえ、先生。これからどうするの?」

「これから…か。」

僕は悩む様な仕草をしたけど、実はもう決めていた。

「旅に出よう…かな。」

「旅？」

「うう。絵を描いてプレゼントしながら、旅する。」

「ドリマみたい。」

裕子さんは笑う。今までみたいな控えめな微笑みじゃなくて、まるで女子学生の様に。

それから、僕らは部屋の片付けをした。ヘンテコなおまかじとの道具の片付けだ。

「布団とか、どうしよう。」

「私、貰つてもいい?」

「ここねど。ボロこなみ?」

「ちゃんと干して、カバー洗えば使えるわ。」

さすが主婦。

荷物は少なかつたけど、全部まとめるには口が暮れかかっていた。

「これで…終わるー」

「じゃあ、出ようか。」

一人で部屋を出る。

裕子さんは部屋を出た後、ドアに向を直り、一礼した。

「」のボロアパートとの別れ。

「じゃあ、」  
「」

「うふ。」

アパートの前で一人、向かって立つ。

「わよひなう。先生。」

「わよひなう。裕子さん。」

別々の方向に歩き出す。…僕が裕子さんの家と別方向に歩いていくだけだけど。

僕らは振り返らない。

「一百メートルくらい歩いて……僕は走り出した。

「う…あああああつ…」

目と鼻から水が流れた。  
叫びながら走り続ける。

僕を見て、買い物帰りのおばちゃんが振り返る。

だつて、だつて。

裕子さんは僕の名前を呼ばなかつたじゃないか。

ああ。こんな事なら。

小学生の時、あのお姉さんに話しかけておけばよかつた。

きっと現実は変わらなかつたけど。

でもほら、僕は異性に対する欲求より食欲の方が強いからさー。

せめて、また逢えた事に。

「ありがとうつーーー」

青空をバックに笑う裸の君に叫んだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8042e/>

---

八月のさいごの日に

2010年12月14日03時03分発行